

論文

大学生の同性愛者に対する態度への 心理的要因の検討

— 性役割態度や属性との関連 —

郷古 さおり 広田 すみれ

本研究では2つの大学の学生126名を対象に、同性愛に対する態度に影響する心理的要因を検討した。授業中に回答に同意してもらえた学生に対して質問紙調査を行い、和田（1996）の同性愛に対する態度の30項目への回答を用いて因子分析を行った結果、第1因子は社会的容認度、第2因子として心理的距離が得られた。これらや性別属性、知識量を用いて態度への影響を重回帰分析で分析した結果、同性愛者及び性的少数者についての知識が多い人ほど社会的容認度が高く、男性は社会的容認度が低かった。また、平等的性役割態度を持つ人ほど心理的距離が近いことが明らかになった。

キーワード：同性愛者、知識量、平等的性役割態度、社会的容認度、心理的距離

1 はじめに

現代社会ではグローバル化が進み、多様な性のあり方に対して社会的認知が進んできている。メディアでLGBT（Lesbian, Gay, Bisexual, Transgenderの頭文字を取った単語で性的少数者の総称）が取り上げられる機会が増えた現代、同性愛を容認する人が増えたように思えるが実際にはどうなのか、そして同性愛に対する態度にはどのような心理的要因が関係しているのか興味を持った。

2 先行研究

和田（2008）の異性愛者の大学生を対象とした研究によると、同性愛者との接触が多い人ほど、同性愛者を拒否しないことが明らかになっている。また、和田（2008）は、同性愛者との接触経験のほかに、同性愛についての知識量について検討し、同性愛についての知識が多い人ほど同意愛者を嫌悪・拒否しない傾向にあることが示している。

石原（2012）の18歳以上の男女を対象とした研究では、固定的な性別役割分業意識が同性愛に対する寛容性と負の関連を持つこと、また、年齢が上である人ほど同性愛に対して好ましくない態度を持つこと、また女性は男性に比べ、同性愛に対して好ましい態度を持つことを示した。

3 研究目的

本研究では先行研究を踏まえて大学生を対象に、どのような心理的要因が同性愛に対する態度に影響するか調査により明らかにすることを目的とした。同性愛に対する態度に影響を与える要因として、性別・大学のカラー、家族形態、同性愛者及び性的少数者についての知識、平等的性役割態度があると仮定した。

4 方法

質問紙調査による。質問紙の構成は以下の通りである。

（1）回答者の属性（性別、年齢、大学名・学部名）

性別は戸籍上の性別を回答してもらった。

（2）家族について

5歳の頃の同居の家族、18歳の頃の同居の家族については、1. 父、2. 母、3. 兄、4. 姉、5. 弟、6. 妹、7. 祖父、8. 祖母、9. その他（記述欄あり）から、当てはまるものすべてに○を付けてもらった。

父親の家事参加度は、桑畑（1994）から引用した。父親と同居の経験がある回答者に、父親の家事参加度を1. よくしている、2. 時々している、3. 気が向いたらする、4. ほとんどしない、5. その他（記述欄あり）から1つ選び○を付けてもらった。

母親の就労形態については、同じく桑畑（1994）を参考に作成した。母親と同居の経験がある回答者に、回答者が5歳の頃・小学校低学年・小学校高学年・中学生・高校生の時、母親の就労について回答してもらった。母親の就労は1. 常勤、2. パート・アルバイト、3. 専業主婦、4. その他（記述欄あり）からそれぞれ1つ選び

GOUKO Saori

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2018 年度卒業生
HIROTA Sumire

東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

○を付けてもらった。

(3) 同性愛及びその他性的少数者についての知識

登坂 (2016) から引用した、「現在、同性愛は性同一性障害のひとつとして定義されている」からなる 10 個の問いに 1. 正しい, 2. 正しくない, 3. わからないから 1 つ選び○を付けてもらった。

(4) 身近な同性愛者及びその他性的少数者の有無

回答者の身近に同性愛者がいるか, 1. いる, 2. いないから 1 つ選び○を付けてもらった。1. いると答えた回答者には, 身近な同性愛者との関係性を 1. 家族, 2. 親戚, 3. 友人, 4. 知人, 5. その他 (記述欄あり) から当てはまるものすべてに○を付けてもらった。また, 身近な同性愛者を同性愛者と知った年齢を記入してもらった。

身近な同性愛者とは別に, 身近に同性愛者以外の性的少数者がいるか, 1. いる, 2. いないから 1 つ選び○を付けてもらった。1. いると答えた回答者には, 身近な同性愛者以外の性的少数者との関係性, 年齢を, 身近な同性愛者の回答と同様に回答してもらった。更に, 身近な同性愛者以外の性的少数者のセクシャリティを 1. レズビアン, 2. ゲイ, 3. バイセクシュアル, 4. FTM, 5. MTF, 6. X ジェンダー, 7. アセクシュアル, 8. その他 (記述欄あり) から, 当てはまるものすべてに○を付けてもらった。

(5) 同性愛に対する態度

和田 (1996) から引用した、「同性愛者は暗い人が多い」からなる社会的容認度を測る問い 18 項目, 「同性愛者とは関わり合いたくない」からなる心理的距離を測る問い 12 項目について, 「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の 5 件法を用い, 1 つ選び○を付けてもらった。

(6) 平等的性役割態度

鈴木 (1994) の『平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S)』を使用した。「女性が, 社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚が難しくなるから, そういう職業を持たないほうがよい」などからなる 15 項目の問いに, 「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の 5 件法を用い, 1 つ選び○を付けてもらった。

(7) 同性愛者及び同性愛者以外の性的少数者であるか

「差し支えなければお答えください」と記載した上で, 回答者が同性愛者であるか, 1. はい, 2. いいえ, 3. わからない, 4. その他 (記入欄あり) から 1 つ選び○を付けてもらった。

さらに同性愛者であるかとは別に, 回答者が同性愛者以外の性的少数者であるか, 1. はい, 2. いいえ, 3. わからない, 4. その他 (記入欄あり) から 1 つ選び○を付けてもらった。1. はいと答えた回答者には, 回答者のセクシャリティを 1. レズビアン, 2. ゲイ,

3. バイセクシュアル, 4. FTM, 5. MTF, 6. X ジェンダー, 7. アセクシュアル, 8. その他 (記述欄あり) から, 当てはまるものすべてに○を付けてもらった。

授業中に, 回答に同意してもらえた学生に対して質問紙調査を行った。東京都市大学では社会心理学関連の授業, フェリス女学院大学ではジェンダー関連の授業であった。平均回答時間は約 15 分であった。分析にあたっては R の 3.5.1 for Windows を用いた。

5 結果

5.1 回答者の基本属性

回答者の内訳は東京都市大学メディア情報学部男性 34 名, 女性 31 名, フェリス女学院大学の女性 60 名 (文学部 48 名, 国際交流学部 8 名, 音楽学部 4 名), その他の大学の女性 1 名, 合計 126 名が分析対象となった (無回答の 3 名, 回答に不備がある 7 名は除いた)。

回答者の平均年齢は 20.4 歳で標準偏差は 1.1 であった。

同性愛者であるかの問いでは, 「はい」が 1 人 (0.8%), 「いいえ」が 118 人 (93.7%), 「わからない」が 6 人 (4.8%), その他が 1 人 (0.8%) であった。また, 同性愛者以外の性的少数者であるかの問いでは, 「はい」が 4 人 (3.2%), 「いいえ」が 112 人 (88.9%), 「わからない」が 6 人 (4.8%), 無回答が 4 人 (3.2%) であった。

5.2 家族について

5 歳の頃, 18 歳の頃の親との同居の状況を集計した。5 歳の頃では「父母と同居」が 120 人 (95.2%), 「母と同居」が 6 人 (4.8%) であった。18 歳の頃では「父母と同居」が 109 人 (86.5%), 「父と同居」が 1 人 (0.8%), 「母と同居」が 10 人 (7.9%), 「その他」が 6 人 (4.8%) であった。5 歳の頃, 18 歳の頃, とともに大半が父母と同居であった。

5 歳の頃, 18 歳の頃の祖父母との同居は, 5 歳の頃では「同居なし」が 108 人 (85.7%), 「祖父母と同居」が 9 人 (7.1%), 「祖母と同居」が 9 人 (7.1%) であった。18 歳の頃では「同居なし」が 109 人 (86.5%), 「祖父母と同居」が 8 人 (6.3%), 「祖父と同居」が 2 人 (1.6%), 「祖母と同居」が 7 人 (5.6%) であった。5 歳の頃, 18 歳の頃, とともに大半が祖父母との同居なしであった。

父親の家事参加度では, 「1. よくしている」が 24 名 (19.0%), 「2. 時々している」が 41 名 (32.5%), 「3. 気が向いたらする」が 21 名 (16.7%), 「4. ほとんどしない」が 37 名 (29.4%) であった。「1. よくしている」と「2. 時々している」を「定期的に家事参加」, 「3. 気が向いたらする」「4. ほとんどしない」を「不参加」と集計し, 「定期的に参加」が 65 名 (51.6%), 「不

参加」が 58 名 (46.0%) であった。「定期的に参加」がわずかに多いが、大きな差はみられなかった。

母親の就労形態では、すべての時期において「常勤」である場合「常勤」、すべての時期において「専業主婦」である場合「専業主婦」、すべての時期において「パート」、もしくは時期によって違う場合を「パート」と集計した。「常勤」が 25 人 (19.8%)、「パート」が 77 人 (61.1%)、「専業主婦」が 21 人 (16.7%) であった。「パート」が最も多く、「常勤」、「専業主婦」は少なかった。

5. 3 身近な同性愛者及びその他性的少数者の有無とそれらについての知識

身近な同性愛者の有無では、「いる」が 36 人 (28.6%)、「いない」が 89 人 (70.6%) であり、調査対象者の 4 分の 1 以上は身近に同性愛者がいるという回答であった。また、身近な同性愛者との関係では「友人」が 36 名、「知人」が 27 名、「その他」が 3 名で、「友人」が最も多かった。

身近な同性愛者以外の性的少数者の有無では「いる」が 16 人 (12.7%)、「いない」が 106 人 (84.1%) であった。同性愛者以外の性的少数者が身近にいる人は、同性愛者よりも少なかった。また、身近な同性愛者以外の性的少数者との関係は「友人」が 14 名、「知人」が 4 名で、身近な同性愛者と同様、「友人」が多かった。

次に同性愛及びその他性的少数者についての知識 10 問について、正解を 1 点、不正解や「3. わからない」の回答を 0 点とし、合計得点を出したところ、回答者の平均点は 5.4 で標準偏差は 2.2 であった。最も正解率が高かった項目は「⑨日本では、同性愛であるがゆえに学校でいじめられたことのある人はいない」で、88.9% であった。最も正解率が低かった項目は「⑩アメリカでは、すべての州で同性婚が法的に認められている」で、16.7% であった。

性別・大学別に「男性・東京都市大学」「女性・東京都市大学」「女性・フェリス女学院大学」の 3 カテゴリーに分けた際のそれぞれの平均点は、「男性・東京都市大学」で 5.1 点、「女性・東京都市大学」で 4.9 点、「女性・フェリス女学院大学」で 5.8 点となり、「女性・フェリス女学院大学」で最も得点が高かったが、最も得点の低い「女性・東京都市大学」との点差は 0.9 点で、大きな差はみられなかった。

5. 4 同性愛に対する態度

次に同性愛に対する態度の 30 項目を用いて因子分析 (主因子法、バリマックス回転) を行った。その結果が表 1 である。結果は和田 (1996) と大きな違いはなく因子構造は大よそ再現された。そのため和田 (1996) と同じく、第 1 因子に高い負荷がみられる「⑧同性愛

は異常な人の行為だ。」(0.821)、「②同性愛者が差別されるのはおかしい。」(-0.701)などの項目は、同性愛を容認しているかどうかを表すと考え、「社会的容認度」とした。第 2 因子に高い負荷がみられる「⑨同性愛者に恋愛感情をもたれるのは嫌だ。」(0.738)、「⑩同性愛者と共同生活 (寮など) を送ることができる。」(-0.583)項目は、同性愛者との接触を避けるかどうかを表すと考え、「心理的距離」とした。因子寄与率は第 1 因子で 0.299、第 2 因子で 0.163 であった。また累積寄与率は第 1 因子で 0.299、第 2 因子で 0.462 であった。

5. 5 平等的性役割態度

次に平等的性役割態度については、問 11 の 15 問について回答を得点として合計得点を出した。その結果、回答者の平均点は 39.4 点、標準偏差は 7.07 であった。これは 15 点から 75 点で計算され、得点が低いほど平等的な性役割態度を持つことを、高いほど伝統的な性役割態度を持つことを意味する。性別・大学の 3 カテゴリーに分けた平均点は、「男性・東京都市大学」で 41.8 点、「女性・東京都市大学」で 40.7 点、「女性・フェリス女学院大学」37.2 点であった。「男性・東京都市大学」で最も得点が高かったが、大きな点差はみられなかった。

5. 6 属性別での同性愛に対する態度の各平均因子得点

(1) 性別・大学別平均因子得点

以下、影響を与える要因別での因子得点の違いを検出した。社会的容認度の因子得点はプラスであると容認度が低く、マイナスでは高いことを意味する。また、心理的距離の因子得点はプラスであると距離が大きく、マイナスでは近いことを意味する。性別・大学別でみると(図 1)、男性・東京都市大では社会的容認度が 0.48、心理的距離が 0.41、女性・東京都市大学では社会的容認度が -0.04、心理的距離が -0.10、女性・フェリス女学院大学では社会的容認度が -0.25、心理的距離が -0.17 であった。この結果からみると、女性は社会的容認度が高く、心理的距離も近かった。大学による違いをみると、「女性・東京都市大」と「女性・フェリス女学院大学」では「女性・フェリス女学院大学」の方が社会的容認度は高く、心理的距離も近かった。一方、男性は社会的容認度が低く、心理的距離も低かったことから、先行研究同様、女性は男性に比べ、同性愛に対して好ましい態度を持つことが示された。

(2) 父親の家事参加度と各平均因子得点

図 2 のように、「定期的に参加」では社会的容認度は -0.01、心理的距離は 0.01、「不参加」では社会的容認度は 0.06、心理的距離は -0.09 であった。したがって父親の家事参加度と同性愛者に対する態度については、

表 1 因子分析結果 各項目の因子負荷量

	I	II
1 同性愛者は暗い人が多い.	0.573	0.121
2 同性愛者が差別されるのはおかしい.	-0.701	-0.276
3 同性愛は愛の一つの形態である.	-0.661	-0.363
4 同性愛者は知的でない.	0.579	0.198
5 恋愛に性別は関係ない.	-0.414	-0.442
6 同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ.	-0.479	-0.313
7 同性愛は純粋なものだ.	-0.527	-0.388
8 同性愛は自由な恋愛の象徴だ	-0.519	-0.333
9 同性愛者は普通の人と変わらない.	-0.500	-0.465
10 同性愛が存在するのは当然だ.	-0.601	-0.391
11 同性愛は社会から排除されるべきだ.	0.721	0.124
12 同性愛は TV・映画(フィクション)の中でのみ存在してもよい	0.508	0.208
13 同性愛は間違っている.	0.660	0.289
14 同性愛者は気が弱い.	0.437	0.164
15 同性愛は不潔だ.	0.792	0.158
16 同性愛は恥ずかしいことではない.	-0.516	-0.473
17 同性愛は不道德だ.	0.703	0.224
18 同性愛は異常な人の行為だ.	0.821	0.282
19 同性愛者とは関わりあいたくない.	0.718	0.433
20 同性愛者と共同生活(寮など)を送ることができる.	-0.222	-0.583
21 同性愛者には近寄り難い.	0.451	0.536
22 同性愛者を上司にもちたたくない	0.524	0.530
23 同性愛者を見るのも嫌だ.	0.725	0.307
24 同性愛と聞くとつい特別視してしまう	0.217	0.425
25 同性愛者と知合いになりたい.	-0.199	-0.464
26 同性愛者が友達にいても普通につきあう.	-0.497	-0.444
27 同性愛者には嫌悪感を抱く.	0.626	0.377
28 好きな人が同性愛者だったら気持ちが冷める.		0.623
29 同性に恋愛感情をもたれるのは嫌だ.	0.195	0.738
30 家族が同性愛者であることは自分の生活に全く影響しない	-0.145	-0.545
寄与率	0.299	0.163
累積寄与率	0.299	0.462

仮説を支持する結果は得られなかった。

(3) 母親の就労と各平均因子得点

図 3 のように、「常勤」では社会的容認度が -0.21, 心理的距離は 0.03, 「パート」では社会的容認度が 0.08, 心理的距離が -0.01, 「専業主婦」では社会的容認度が -0.03, 心理的距離が -0.13 であった。母親の家事参加度と同性愛者に対する態度については、仮説を支持する結果は得られなかった。

(4) 同性愛者及び性的少数者についての知識と各平均因子得点との関係

次に知識との関係を見るために因子得点と知識の得点の相関を見たものが図 4, 図 5 である。社会的容認度との相関は -0.35, 心理的距離との相関は 0.17 であった。同性愛者及び性的少数者の知識と社会的容認度では弱い負の相関がある。つまり、知識量の少ない人ほど、同性愛者に対する社会的容認度が低い傾向があるといえる。

(5) 身近な同性愛者の有無との関係

身近な同性愛者の有無による因子得点は、「いる」では

社会的容認度は -0.28, 心理的距離は -0.54, 「いない」では社会的容認度が 0.13, 心理的距離は 0.20 であった(図 6)。これからみると、同性愛者と接触のある人の方が社会的容認度は高く、心理的距離も近いことがわかる。

(6) 身近な同性愛者以外の性的少数者の有無との関係

一方、身近な同性愛者以外の性的少数者の有無による

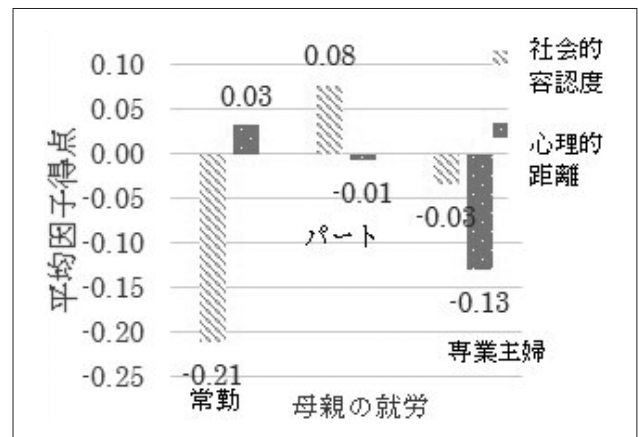


図 3 母親の就労と同性愛に対する態度

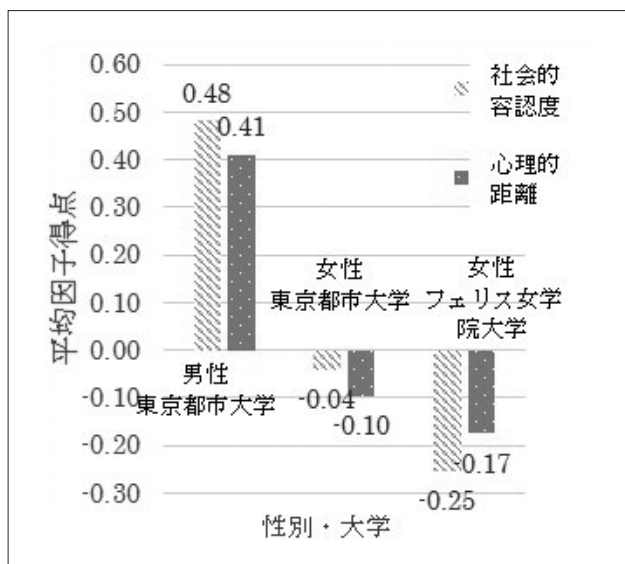


図 1 性別・大学と同性愛に対する態度

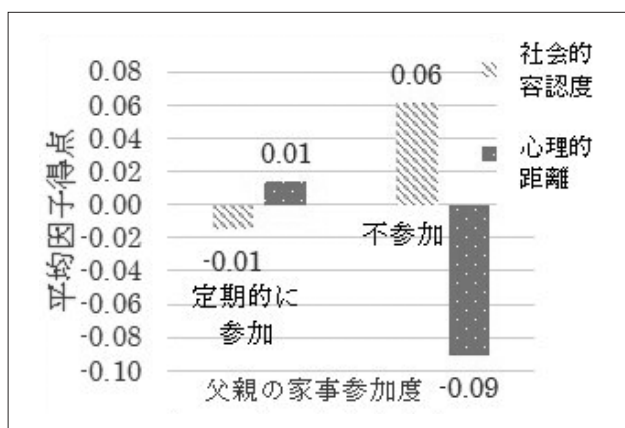


図 2 父親の家事参加度と同性愛に対する態度

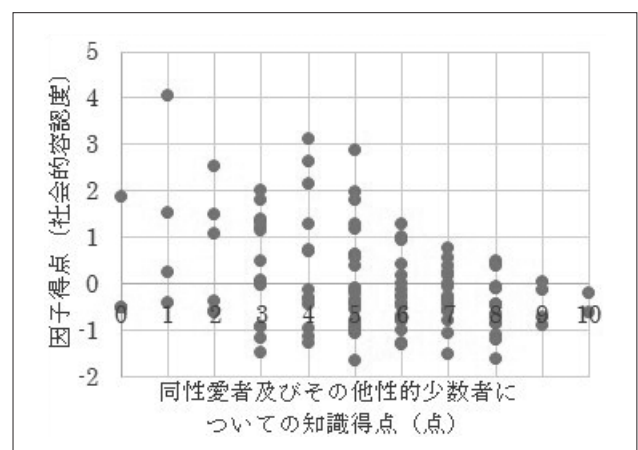


図 4 同性愛者及びその他性的少数者についての知識得点と社会的容認度との散布図

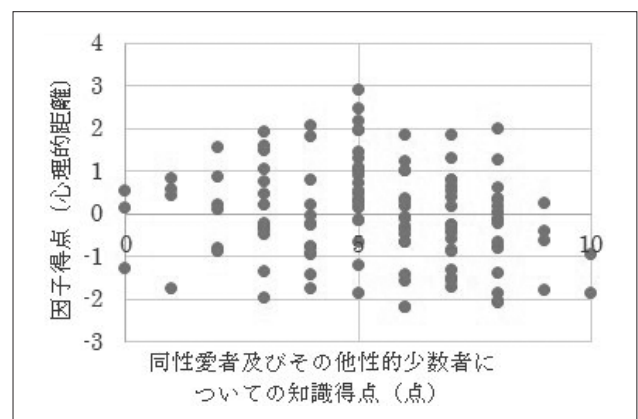


図 5 同性愛者及びその他性的少数者についての知識得点と心理的距離との散布図

違いでは（図7）,「いる」では社会的容認度は-0.15, 心理的距離は-0.74,「いない」では社会的容認度は0.05, 心理的距離は0.10と,身近な同性愛者の有無同様, 性的少数者と接触のある人の方が社会的容認度は高く, 心理的距離も近かった。

5.7 平等的性役割態度と各平均因子得点との関係

図8, 9は平等的性役割態度（鈴木, 1994）の得点と因子得点の関係を表したものである。社会的容認度との相関は0.22, 心理的距離との相関は0.36と平等的性役割態度と心理的距離では弱い正の相関がある。つまり, 平等的な性役割態度を持つ人ほど, 同性愛者に対する心理的距離が小さい傾向があるといえる。

5.8 各因子得点と要因の関連（重回帰分析）

最後に性別（基準変数：男性）・大学（基準変数：フェリス女学院大学）の組合せの3カテゴリと, 同性愛者及び性的少数者についての知識, 平等的性役割態度が社会的容認度及び心理的距離に与える影響を検討するため, 重回帰分析を行った結果が表2である。

同性愛者及び性的少数者についての知識から社会的

容認度に対する標準化偏回帰係数は0.1%水準で有意であった。また,「男性・東京都市大」から社会的容認度に対する負の標準化偏回帰係数は5%水準で有意であった。これは同性愛者及び性的少数者についての知識が多い人ほど社会的容認度が高いことを意味する。また,「男性・東京都市大学」であれば社会的容認度が低い傾向があることを意味する。この結果から, 男性は女性より社会的容認度が低く, また同性愛者及び性的少数者についての知識が多いほど同性愛者に対する社会的容認度が高いといえる。

一方心理的距離については（表3）, 平等的性役割態度の標準化偏回帰係数が0.1%水準で有意であった。これは平等的な性役割態度を持つ人ほど心理的距離が近いことを意味する。この結果から, 平等的な性役割態度を持つ人は伝統的な性役割態度を持つ人より同性愛者に対する心理的距離が近いといえる。

6 考察

6.1 性別と同性愛に対する態度

性別でいえば女性よりも男性の方が同性愛者に対して非好意的だった。また, 重回帰分析でも男性は社会的

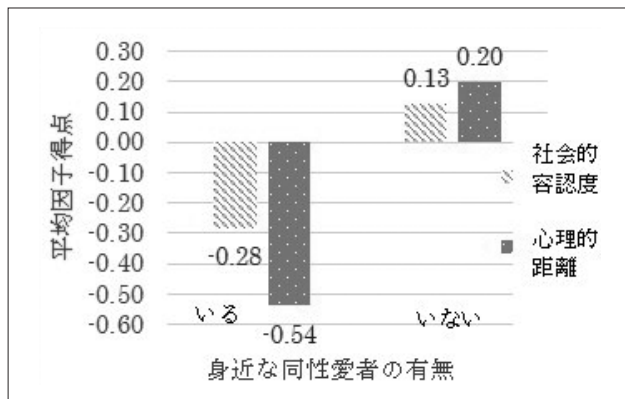


図6 身近な同性愛者の有無と同性愛に対する態度

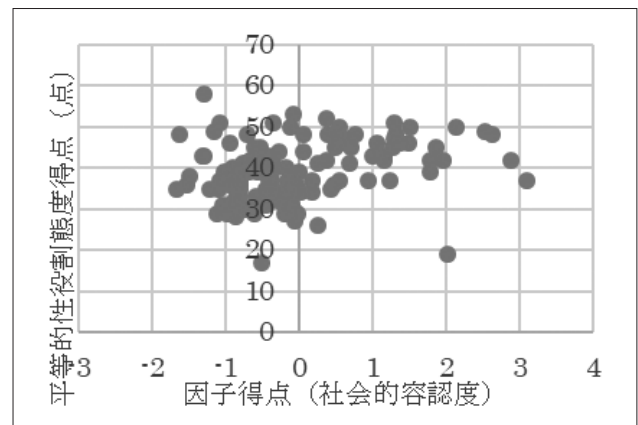


図8 平等的性役割態度得点と社会的容認度との散布図

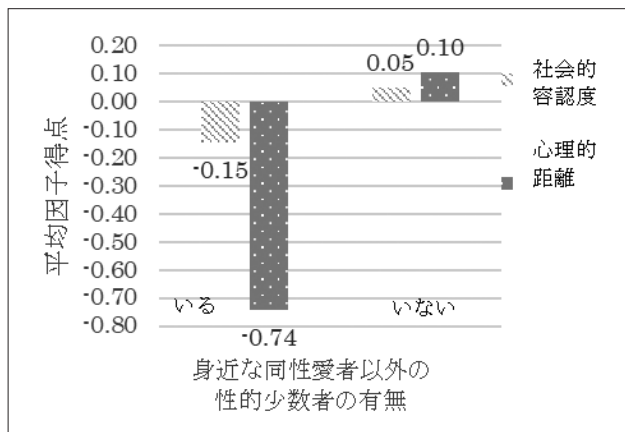


図7 身近な同性愛者以外の性的少数者の有無と同性愛に対する態度

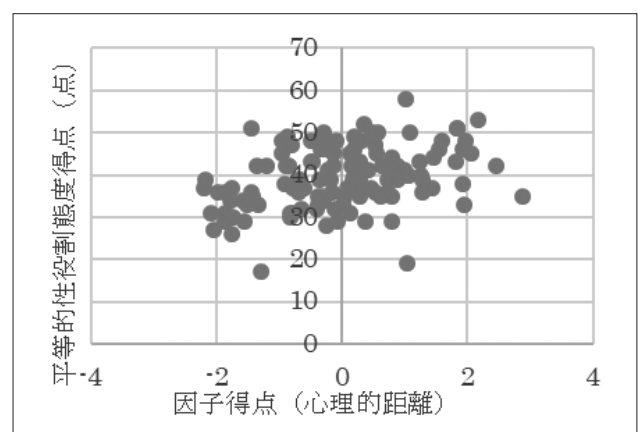


図9 平等的性役割態度得点と心理的距離との散布図

容認度の低さに対して有意な負の影響があることが明らかになった。

その理由として、Kite & Whitley (1998) によると、同性愛者の男性が激しい嫌悪の対象になるのは、彼らが「男性である」という優位性を放棄していると認識されているためである。また、Herek (2002) は、男性性の文化的規範は男性たちに常に自らが同性愛者ではないことを証明することを要求しており、その方法の一つが男性同性愛者への攻撃であると説明している。

これらに加えてさらに、メディアで男性同性愛者が面白可笑しく取り上げられていることも関係すると考えた。男性という同じ属性の人がメディアで嘲笑的にされているため、拒絶することで男性同性愛者を異性愛者の自分とは別と扱い、自己を保身していることが考えられる。

6. 2 家族構成等と同性愛に対する態度

家族と同性愛に対する態度の関係について、仮説は支持されなかった。その理由の1つとして、親との同居の状況や祖父母との同居の状況と同性愛に対する態度の関係については回答者の回答に偏りがあったことから、十分な検証を行うことができなかった可能性がある。

表 2 社会的容認度の重回帰分析結果

説明変数	β	SEB
性別	0.54*	0.24
大学	-0.02	0.22
同性愛者と性的少数者の知識	-0.34***	0.09
平等的性役割態度	0.12	0.09
R^2	.18	

表 3 心理的距離の重回帰分析結果

説明変数	β	SEB
性別	0.47	0.26
大学	0.16	0.24
同性愛者と性的少数者の知識	-0.14	0.09
平等的性役割態度	0.37***	0.10
R^2	.15	

また父親の家事参加度、母親の就労と同性愛に対する態度について、仮説のような結果が得られなかった理由には、社会の変化が考えられる。現代社会では、全般に女性の社会進出が推進され、男女平等の考えが促進されている。そのため、実親の家事参加度や就労状況と脱標準的な家族への寛容的な態度は大きな関連はなく、脱標準的な家族への寛容的な態度を測れなかったのではないかと考えた。

6. 3 同性愛者及び性的少数者についての知識と同性愛に対する態度

同性愛者及び性的少数者についての知識が多い人ほど社会的容認度が高かった。しかし、同性愛者及び性的少数者についての知識が多い人ほど心理的距離が小さくなるわけではなかった。これは、知識量は表面的な態度を変容させるが、潜在的な態度を変えるわけではないことを意味すると考えた。同性愛者に対する潜在的な態度を規定する要因はジェンダーや家族に関する価値観にあると考えられる。

6. 4 身近な同性愛者の有無、身近な同性愛者以外の性的少数者の有無と同性愛に対する態度

身近に同性愛者がいる人ほど、同性愛に対する社会的容認度が高く、心理的距離も近かった。これは先行研究とも一致する結果である。身近に同性愛者以外の性的少数者がいる人も同様に、同性愛に対する社会的容認度が高く、心理的距離も近かった。同性愛に限らず多様な性のあり方を経験することで、経験した性のあり方以外の性のあり方も容認、関わりを持つことを拒絶しないと考えられる。

6. 5 平等的性役割態度と同性愛に対する態度

平等的な性役割態度を持つ人ほど心理的距離が近かった。これは、石原 (2012) の研究と同様の意味を持つ結果と言える。同性愛は伝統的な恋愛や家庭のあり方にあてはめることが難しい。伝統的な性役割態度を持つ人にとって同性愛は理解し難く、遠く感じてしまうと考えられる。一方、平等的な性役割を持つ人は、同性愛を不自然と思わないため、心理的距離も近いのではないのだろうか。

引用・参考文献

- Herek, G.M. (2002). Gender Gaps in Public Opinion about Lesbians and Gay Men. *The Public Opinion Quarterly*, 66 (1), pp.40-66.
- 石原 英樹 (2012). 日本における同性愛に対する寛容性の拡大——「世界価値観調査」から探るメカニズム——, 相関社会科学, 第 22 号, pp.23-41

- Kite, M. E. and B. E. Whitely Jr. (1998). Do Heterosexual Women and Men Differ in Their Attitudes toward Homosexuality? A Conceptual and Methodological Analysis. G.M.Herek (eds.), *Stigma and Sexual Orientation: Understanding Prejudice against Lesbians, Gay Men and Bisexuals*, pp.39-61, Sage.
- 桑畑 美沙子 (1994). 性役割に関する大学生の意識と教育課程研究 (第2報): 父母の生活形態の違いによる性別役割分担意識と学校教育のあり方, 日本教科教育学会誌, 20 (1), pp.17-25
- 鈴木 淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成, 心理学研究, 65 (1), pp.34-41
- 登坂 如恵 (2016). 青年期における同性愛への態度に関する研究—ジェンダー・アイデンティティおよび同性愛についての知識と関連から—, 東北大学大学院教育学研究科平成28年度修士論文. 東北大学機関リポジトリ (2018年10月30日) <http://hdl.handle.net/10097/00113176>
- 和田 実 (1996). 青年の同性愛に対する態度: 性および性役割同一性による差異, 心理学研究, 12 (1), pp.9-19
- 和田 実 (2008). 同性愛に対する態度の性差—同性愛についての知識, 同性愛者との接触, およびジェンダー・タイプとの関連—, 思春期学, 26 (3), pp.322-334